

## 第 36 回電気通信普及財団賞 受賞論文 ～テレコム社会科学賞～

<順不同、敬称略>

※受賞者の所属は当論文賞受賞時のものです。執筆時と異なる場合は括弧内に記載。

### 入賞

#### 「モバイルメディア時代の働き方」

(書籍発刊：勁草書房，2019年7月)

松下 慶太 関西大学 社会学部 教授  
(実践女子大学人間社会学部 准教授)

新型コロナウイルス感染症拡大以前の働き方に対して違和感をもっていた若者は多かった。本書は、自分の価値観や幸福観に合わせて、どのように働くことができるのか、そうした視点を与えてくれる。モバイルメディアやソーシャルメディアの発達によって、時間と場所を問わずにコミュニケーションが可能となり、またオンラインを前提とした参加意識・ライブ感の意義が今まで以上に高まってきている。新型コロナウイルス感染症拡大以前の2019年7月に刊行された著書であるが、現在の状況を一部先取りした新規性のある興味深い内容であり、テレコム社会科学賞に値する優れた著書である。

### 奨励賞

#### 「起業プロセスと不確実性のマネジメント —首都圏とシリコンバレーの Web ビジネスの成長要因—」

(書籍発刊：白桃書房，2020年3月)

田路 則子 法政大学 経営学部／大学院経営学研究科 教授

少子高齢化に直面し、年々日本の国際競争力は低下している。経済の活力の復活には「新」を生み出す起業が非常に重要である。本書は、Web ビジネスについて定量的に起業の「真実」に迫っている。また日米の起業事例についてフィールド調査を行い、不確実性への対処方法を示している。Web ビジネス以外の起業にも本書はアイデアを提供するものであり、示唆に富む著書である。

### 奨励賞

#### 「情報革命の世界史と図書館 粘土板文書庫から「見えざる図書館」の出現へ」

(書籍発刊：樹村房，2019年7月)

山口 広文 立正大学 文学部 特任教授

本書は、長年の図書館勤務経験に基づき、メソポタミアから現代までの図書館の発展を論じた読み応えのある作品であり、学ぶことが多い。第一部、第二部は一部を除き、既存の文献の引用的記述であると同時に、この著作の主たるテーマであろう第9章のICTと図書館について技術的・法的な面も含めて、もう少し展開があると更に良かった。



## 奨励賞

### 「情報自己決定権と制約法理」

(書籍発刊：信山社，2019年12月)

實原 隆志 福岡大学 法学部 教授

本書は、日本とドイツの比較法的観点から情報自己決定権について綿密な分析と評価を加えることにより、情報通信の発展を支える法制度にとって不可欠な法的視座を提示した本格的な研究書である。今後は、英米法やEU法も視野に入れて、GAFAからの個人情報保護などの最新課題にも取り組んで、研究を深化・発展させてほしい。

## 奨励賞

### 「〈情弱〉の社会学ーポスト・ビッグデータ時代の生の技法ー」

(書籍発刊：青土社，2019年9月)

柴田 邦臣 津田塾大学 学芸学部 准教授／インクルーシブ教育支援室 ディレクタ

本書は、ビッグデータ時代をM. フーコーの規律権力理論から解明しており、前半の視点は鋭いところがあり評価できる。一方、情弱を切り口として展開される後半部分との整合性は十分とは言い難い。フーコーによる狂気やセクシュアリティの分析は、理性の相対化や性の虚構を洗い出す哲学的な深い探究に、また情弱についてもネットワーク空間での人的実在の虚構化を問うことに繋げて行って欲しい。